# 日本漢音に於ける声調変化

## ――岩崎文庫本『蒙求』を中心に――

佐々木　勇

### 一、問題の所在

日本漢音の声調は、切韻系韻書の声調と大旨一致する為、従来、日本漢字音の問題として是を取り上げ、研究される事は、少なかった。中国原音の変化に基く、「上声全濁字の去声化」こそ、我が国にも見られるが[1]、我が国独自の声調変化は、平安・院政時代には見られない、と考えられている[2]。

しかし、正安二年（一三〇〇年）の訓点を伝える『醍醐寺本遊仙窟』では、『広韻』声調に一致しないものの割合が増して来る事が、柏谷嘉弘氏により指摘され[3]、湯沢質幸氏が、『文明本節用集』の声点の分析を通して、

少なくとも室町時代中期までには、漢字音の声調の日本語化、すなわち、かなで書かれた漢字音を日本語のアクセント体系にのっとって発音すること、が行われていたと考えてよさそうである。

と、まとめている[4]様に、鎌倉、室町と時代が降るに従って、『広韻』声調との齟齬が、大きくなる方向が、一方には存するのである。

これまでの、日本漢音に我が国独自の声調変化が見られないとする考えは、平安・鎌倉時代の漢音読訓点資料の、一部の調査に依り、しかも、例外を切り捨てた大方の傾向によって、説かれて来たものであった。が、問題とされなかった例外の中に、後の時代の『広韻』声調とのずれに関係する何らかの共通性が、見られる可能性が存する。また、平安・鎌倉時代に、後の時代に繋る大きな変化を見せる新資料を見出す可能性も否定できない。

即ち、ほぼ『広韻』の声調に一致する、平安時代の漢音直読

資料の状態と、声調が、実際の語の発音に際して、問題とされなかったと思われる『文明本節用集』の状態とは、どの様に繋るものなのか、或いは、当初より、全く性格の異なるものであるのか、という問題が、有る。その前提として、日本漢音に、我が国独自の声調変化が存するのか否かが、問題となる。

## 二、問題解明の方法と資料

日本漢音声調の時代的変遷の調査には、できる限り性格の等しい資料を、時代順に並べ、その相違点を記述する方法が、採られるべきであろう。その際、漢音読訓点資料や辞書の様に、呉音を交えた資料の中から、漢音を抜き出して行なう調査に先行して、全体を漢音で読誦した漢音直読資料による分析が、試みられるべきであろう。

本稿では、漢音で直読された事が確かであり、日本漢音研究の好資料とされる『蒙求』の標題本を取り上げ、声調変化について考察する。『蒙求』の標題本には、詳密な声点加点本が、平安時代中期から室町時代に亘って、知られているからである。

次下に、今回使用した『蒙求』標題本と、標題本以外の参考資料について、略述する。

A、標題本

(1)保阪潤治氏旧蔵本[5]（長承本）

築島裕博士によれば、本書には三種の点が存する。

①天暦頃朱点―全巻に声点を加点し、八十二行目までには、所々に仮名音注を施す。

②長承三年点―奥書「長承三年十二月廿七日（花押）／僧琳兌[2]之本也」に対応する点で、①と異なる墨声点を所々に加え、全巻に仮名音注を加える。

③院政末～鎌倉初期点―②とほぼ同時期の点で、全巻の所々に仮名音注を施している。

本稿では、①天暦頃朱点を、伝存最古の『蒙求』の読誦音として、採用した。

(2)建保本[6]

奥書「本云建永元季　年者（ママ）／聖主嗣寶暦之第八季微臣侍御讀之第三季也今奉授此／書改新寫此本以先親傳我之訓今日及授君之説抑／又藤黄門者累代師於　天子自親／於我家借其證本重所見合也為我後傳此本之者努〻／勿許勿許他見而已／瀚林主人菅在判／建保六季十月以嚴親御本書寫畢／同寫點了／以累代之證本書寫點交　道順」。この奥書によれば、建永元年（一二〇六年）に、菅原為長が、侍読の為に家説によって加点した新写本を用意した。その際、藤黄門から證本を借用して見合した。以上の本を祖本として、建保六年（一二一八年）に書写移点が行なわれ、更に後に、醍醐寺座主を務めた道順（一二六九年―一三二一年）によって、書写移点されたものが、本書であると思われる。全巻に亘って、



声点と仮名音注が加点されている。仮名音注は、建保の姿を残しながらも、道順書写当時の要素を多く交えるものであるが、声点は、建保の点を伝えるものと思われる。

(3)岩崎文庫本

弘誓院九条教家（一一九三年―一二五五年）の書写と伝えられる。奥書は、見られないが、本文・仮名の字体より、鎌倉中期～後期の書写かと思われる。序・薦表を備える完本であり、全巻に、朱声点と墨仮名が、詳密に加点されている。声点は、平・入声に軽重を区別する六声体系で加点される事は、他本に等しいが、平・入声の軽点の位置が、他本よりも高く、重点とはっきり識別できる点が、特徴的である。

(4)康永本[7]

奥書「康永三年五月九日書寫不訖／貞和元年十二月廿七日以秘本一校早／同廿八日鑽仰了／貞和二年太蔟廿一日授駒一磨既／訖／直範」。この奥書によれば、本書は、康永四年（一三四五年）書写移点、貞和元年（一三四五年）十二月に「秘本」を以て校合されたものである。全巻に、墨声点と墨仮名とが有り、貞和元年校合の際の書込みが、種々見られる。[8]

(5)竜谷大学図書館本

巻尾欠損の為、奥書は存しない。本文・仮名の字体より、室町時代の書写加点であると思われる。全巻に、墨

**墨声点と墨仮名とが、加点されている。声点の位置に、曖昧なものが多く、移点本である事が知られる。**

**B、標題本以外の参考資料**

**(6)国立国会図書館蔵『蒙求和歌』**

**奥書は、見られないが、本文・仮名の字体・紙質から判断して、鎌倉時代初期の書写であると思われる。蒙求の標題部分には、墨声点（稀に朱声点）・墨仮名が施され、当時の蒙求読誦音を知る上で、参考となる。**

(7)真福寺本『蒙求』

鎌倉時代後期書写と見られる有注本である。標題の「季札掛劔」（四句一行標題本で102行目）から、「束晳竹簡」（同じく144行目）までの、三十二丁（一冊）を残すのみであるが、標題部分には、墨声点・墨仮名が加えられ、参考となる。

(8)国立国会図書館蔵『重新點校附音増註蒙求』

所謂増注本の一本である。応永七年（一四〇〇年）刊。標題部分には、応永から左程降らないと思われる朱墨声点、及び朱墨仮名音注が施されている。

## 三、岩崎文庫本『蒙求』の特異性

前節に掲げた八本の声点を対照させると、(3)岩崎文庫本が、他本とは異なる様相を呈する事に、先ず、気づかれる。そこで、『蒙求』諸本により、声調変化について考察するに当た

り、他本と異なりの最も著しい岩崎文庫本の声調全体の姿を捉えた上で、現存最古の(1)保阪本天暦頃点との比較を中心に、その相違の原因について考察し、後に、他の諸本との比較を行なうという方法を採りたい。八本総てを同時に比較し、その相違点を分析することは、声調変化の規則性を見出す為の最良の方法とは、言い難いからである。

(1)『広韻』の声調体系との比較

岩崎文庫本（以下、本資料）の声調と、『広韻』の声調との比較表を作製してみると、表Ⅰの如くであり、『広韻』声調と大旨一致するものの、相違する点が、幾つか見られる。大きな相違点は、次の三点である。

一、『広韻』平声清・次清字の約5％が、本資料で上声となる。

二、『広韻』上声全濁字の約40％が、本資料で去声となる。

三、『広韻』去声字の約30％が、本資料で上声となる。

右の三点の中、二の、上声全濁字の去声化は、保阪本天暦頃点に、既に見られるものであり、建保本、康永本と降るに連れて、去声化の割合が高くなる事が報告されている。[9] しかし、蒙求諸本中、右の一・三の如き傾向を示すものの存在は、指摘されておらず、他の漢音資料についての報告も無い。そこで、次に、この二つの傾向が見られる理由について考察し、その後に、本資料の上声全濁字の去声化について検討し、最後に、それぞれの事柄について、他の蒙求諸本との比較を行な

（各欄の上の数は、異なり字数。（）内は、延べ出現字数。以下同じ。）

表Ⅰ

| 広韻 / 岩崎本 | 平 | | | | 上 | | | | 去 | | | | 入 | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 清 | 次清 | 濁 | 清濁 | 清 | 次清 | 濁 | 清濁 | 清 | 次清 | 濁 | 清濁 | 清 | 次清 | 濁 | 清濁 |
| 平重 | 169 (216) | 46 (56) | 180 (234) | 186 (286) | 10 (11) | 3 (3) | 12 (14) | 5 (5) | 12 (13) | 3 (3) | 8 (11) | 6 (7) | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 平軽 | 129 (205) | 35 (45) | 15 (15) | 5 (5) | 2 (2) | 0 | 1 (1) | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 (1) | 0 | 0 |
| 上 | 13 (19) | 4 (5) | 0 | 3 (3) | 106 (152) | 37 (52) | 37 (53) | 72 (107) | 37 (51) | 8 (8) | 22 (28) | 26 (32) | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 去 | 7 (7) | 0 | 1 (1) | 1 (1) | 9 (9) | 2 (3) | 28 (47) | 5 (6) | 80 (113) | 25 (31) | 43 (60) | 37 (59) | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 入軽 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 82 (107) | 35 (45) | 38 (62) | 50 (63) |
| 入重 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 30 (42) | 4 (4) | 20 (24) | 14 (15) |



いたい。

(2)『広韻』平声清・次清字に対する上声点加点例について

『広韻』平声清・次清字の内、本資料で上声点が加点されたものが、17字24例存する（表Ⅰ）。当該字を出現順に記せば、次の通りである。（当該字の下の（　）内の数字は、四句一行標題本の行数。以下同じ。）

①『広韻』平声清

詩（5）歌（5）多（6 42 95）悲（9）絲（9）裾（12 18）師（31）威（35）施（38）蘓（46 68 99）之（52）奇（55 101）荆（58）

②『広韻』平声次清

初（5）車（81 87）癡（98）頗（131）

日本漢音声調は、『広韻』声調とほぼ一致するが、全同ではない。右の17字24例の中には、我が国漢音では平声に非ざるものが含まれている可能性が、有る。即ち、『蒙求』伝来時に、既に上声であった可能性が存するのである。そこで、右の17字の声調を、保阪本によって確認すると、以下の如くである。

ⓐ平声軽

詩（5）歌（5）多（6 42 95）悲（9）絲（9）裾（12 18）師（31）威（35）施（38）蘓（46 68 99）之（52）奇（55）荆（58）車（81 87）癡（98）頗（131）

**ⓑ上声**

**初（5）**

**ⓒ保阪本では別字**

**奇（101）**

**此に見られる通り、本資料で上声点が加点されている『広韻』平声清・次清字に対して、保阪本では、大部分、平声軽の差声が、なされている。『広韻』平声清・次清字は、日本漢音では、多く平声軽として捉えられたのであり、[10] 右の諸字も、例外ではなかったのである。よって、ⓐの諸字は、『広韻』平声であるばかりでなく、平安中期の蒙求読誦音としては、平声軽であったことが、知られる。**

ⓑの「初」は、建保本以下諸本では、平声または平声軽であり、保阪本の誤点の可能性が存する為、今は除外する。ⓒの「奇」も、保阪本の声調との比較が不可能である為、除外する。

斯くして、保阪本で平声軽の字（平安中期の蒙求読誦音として平声軽の字）が、本資料で、上声となるものは、16字22例となる。この両本の差異の意味について、以下検討を加えたい。

ⓐの16字22例を、改めて見るに、「荆」を除き、総て一音節字[11]である点に気づかれる。そこで是が、偶然か否かを確認する為に、保阪本で平声軽の漢字の総てについて、本資料で如何なる差声がなされているかを調べ、一音節字・二音節字の別に依って分けたものが表Ⅱである。

表Ⅱ

| | 一音節字 | 二音節字 |
|---|---|---|
| 平軽 | 4 (8) | 106 (213) |
| 平重 | 40 (52) | 110 (152) |
| 上 | 15 (21) | 1 (1) |
| 去 | 0 | 7 (7) |
| 計 | 59 (81) | 224 (373) |

表Ⅱの一音節字と二音節字とを比較すると、次の相違点に気づかれる。

(i)一音節字に、平声軽の例が、圧倒的に少ない。

(ii)一音節字に、上声の例が、15字21例見られるのに対して、二音節字には、1字1例見られるに過ぎない（前述）。

(iii)一音節字には、去声の例が、見られない。

本資料の声調は、一音節字であるか、二音節字であるかによって、大きく相違するものであると言えよう。是は、保阪本では、いずれも平声軽の加点が見られる例について調査した結果であった。此処に現れた保阪本と本資料との差異は、天暦頃と鎌倉中後期との時代差による声調変化の結果生じるものであると、考えることができる。そして、その声調変化は、我が国に於ける変化である。抑、漢字について、一音節字か二音節字かという区別は、我が国に於いて生じるものであるからである。よって、右の(i)(ii)(iii)の事実は、鎌倉中後期の『蒙求』の一本である本資料に見られた我が国独自の声調変化の現れ、として捉えられる。

斯く考えた時、一音節字に平声軽が、極く僅かであり(i)、平声軽から上声に移行したと思われる例が存する(ii)という事実は、院政時代には既に生じ、鎌倉時代中期にほぼ完了する和語のアクセント変化である処の「平声軽音節の上声化」[12]を想起させる。本資料が書写加点された鎌倉中後期には、和語に於いては、平声軽音節が、ほぼ消滅していたと考えられるのであり、本資料の一音節字に、平声軽加点例が極めて少ないのは、この和語のアクセント変化の影響を蒙ったが為ではないかと考えられて来る。保阪本で平声軽でない本資料平声軽加点例を見ても、二音節字には、53字55例を指摘できるのに対して、一音節字は、該当例が一例も無いことが、是を裏づける。

此処で、一音節字ながら平声軽を保つ4字8例が、問題となる。その具体例を、句の形で、左に記す（仮名音注は省略）。

郝隆・曬書（18）程邈・隷書（63）徳潤・傭書（92）孔翊・絶書（131）陳琳・書檄（148）司馬稱・好（40）王陽・褒衣（135）陶潛・歸去（122）

「書」は、『蒙求』本文に5回出現し、本資料では、その全5例に、平声軽点が加点されている。建保本では、全加点例3例が、平声重であるが、康永本では全5例に、平声軽点が加点される。比較的遅くまで、平声軽字として、伝えられたのであろう。

「司」は、建保本の対応箇所に、「司」（シキ）と有り、平声軽点が加点されている。本資料の序文でも、「司（シイ）—業（クワウ）」と付訓され、「司」に平声軽点が加点された用例が存し、問題とする40行目の例も、長音化していた可能性が有る。

「衣」「歸」は、本資料内に、平声点加点例をも持つ。当該例に限り平声軽となる理由は、詳らかではないが、「依」については、平声（低平調）が続いた後の最終音節である点が、関係している[13]のであろうか。

以上、本資料の一音節上声字の中には、和語の「平声軽音節の上声化」の影響を受けて、本来の平声軽字が、上声に移行した例が存するであろう事を述べた。しかし、本資料には、和語の「平声軽音節の上声化」として説かれている事柄と、大きく相違する点が、存する。それは、本来平声軽の字が、本資料では、上声よりも、寧ろ平声重に多く移行している点である。和語の影響を受けたとは言え、漢字音には漢字音の、別の要素を考えなければならないのかも知れない[14]。

(i)(ii)の事実が、和語アクセントの影響と考えられて来た時、(iii)の一音節字には去声の例が見られないという事実も、和語アクセントの影響ではないかと、思われて来る。

平声軽音節の上声化と同様、鎌倉時代に顕著な和語のアクセント変化として、「去声音節の上声化」が挙げられる。一音節去声字が、全く見られないのは、このアクセント変化の影響ではないかと予想される。この予想は、次項に於いて、確認される。

### (3)『広韻』去声字に対する上声点加点例について

**『広韻』去声字に対する、本資料上声加点例が、93字119例存する。本資料の『広韻』去声字の約30%に当たる数であり、例外とするには、あまりに多過ぎる。本項では、この93字119例について、考察を加えたい。**

**前項同様、『広韻』去声字の内、保阪本の天暦頃点でも、やはり去声である例に、本資料で如何なる差声がなされているかを調べる方法を採る。その理由は、前述した如くであり、保阪本の天暦頃点の声調が、『広韻』声調と大差ない事も、前項同様である。**

調査結果を数量的に処理し、分析の目的から、一音節字・二音節字に分類したものが、表Ⅲである。

表Ⅲ

| | 一音節字 | 二音節字 |
|---|---|---|
| 去声 | 9 (9) | 144 (231) |
| 上声 | 58 (77) | 20 (21) |
| 平声 | 10 (12) | 14 (16) |
| 計 | 77 (98) | 179 (269) |

前項同様、一音節字と二音節字とでは、明らかな差異が見られる。保阪本の去声字が、一音節字では80%近く上声に移行しているにも拘らず、二音節字の上声加点例は、10%に満たない。この結果は、前項末の予想の正当性を示すものであ

る。本資料が書写された鎌倉中期～後期には、和語及び日本呉音では、去声音節は、少数の例外を除き、上声化していたのであり[15]、一音節字に限り上声に移行した例が多いという右の事実は、その和語及び日本呉音のアクセント変化の影響の現れであろうと解される。

すると、一音節字の去声加点例9字9例は、上声化せずに、去声を留めている例となる。その9例を、次に句の形で掲げる（仮名音注は、省略）。

①句頭

賀循儒宗（20）季珪士首（113）顧榮錫炙（130）謝鯤折齒（136）二疎散金（139）

②句中の発音の頭（建保本の区切り線に依る。）

載遶破琴（50）孺子致蒭（102）

③その他

誥汾興魏（23）侯覇臥轍（59）

9例中、句頭または句中の発音の頭の例が、7例を占める。和語の去声音節は、第一音節に比較的遅くまで残存することが報告されており[16]、日本呉音の一音節去声字は、句頭または語頭の場合に、上声化が後れる事を、曽て、指摘した[17]。本資料の一音節去声字が、発音の始めに残存することも、これらと同様の事象として捉えられよう。

次に、二音節字にも、20字21例の上声化例が存する点が、問題となる。その21例を、直前の字の声調によって分類して掲げれば、以下の通りである（仮名音注は、省略）。

ⓐ直前の字が去声

王覧友悌（15）衛瓘撫床（21）蔡嵩須盗（42）交甫解珮（43）鄧艾大志（55）袁躭後邁（67）翼奉觀性（79）荀訓歴家（82）晉恵聞墓（82）仲文昭鏡（91）趙孟疵面（95）衛玠羊車（103）蔡順分椹（111）盛彦感蟾（136）舅倩三冬（145）

ⓑ直前の字が上声

梁習治寂（8）季彦領袖（32）虞騣體望（127）荀第轉酷（146）

ⓒ直前の字が平声

士衡患多（6）豫讓呑炭（85）

直前の字が去声の例（ⓐ）と、上声の例（ⓑ）とで、21例中19例を占める。直前の字が、去声または上声である事が、上声化に影響したものと考えられる。去声字が、去声・上声に続く際に上声化する「連音上の声調変化」は、当時の和語のアクセント体系と関連させて、日本呉音について、既に指摘されている[18]。本資料の分析によって、日本漢音資料の中にも、同様の事象が指摘できたこととなろう。

直前の字が平声の例（ⓒ）が、2例ながら見られるが、当該字が撥音韻尾を有する点に、その理由を求められようか[19]。

**(4)『広韻』上声全濁字の去声化例について**

**日本漢音は、中国原音の声調変化である「上声全濁字の去声化」を伝えており、去声化の割合が高いものが、新しい層**



**の漢音であると説かれている。**

本資料には、『広韻』上声全濁字に上声点が加点された例が、37字53例存するのに対して、ほぼ同数の28字47例の去声化例が見られる（表Ⅰ）。しかし、上声全濁字を、前項までと同様に、日本漢音として一音節字か二音節字かによって分けると、表Ⅳの通りであり、一音節字に上声の例が、圧倒的に多い点に気づかれる。

表Ⅳ

| | 上 | 去 | 計 |
|---|---|---|---|
| 一音節字 | 24 (40) | 1 (1) | 25 (41) |
| 二音節字 | 13 (13) | 27 (45) | 40 (58) |

上声全濁字の去声化は、中国に於いて生じた声調変化であるが、中国側には、一音節字・二音節字の区別は無い。よって、この差異は、我が国に於ける問題として考えられなければならない。此処で、前項で指摘した一音節去声字の上声化が関わっていることが知られるのである。即ち、本資料の上声全濁の一音節字の中には、中国側の変化を反映して去声化した後に、「一音節去声字の上声化」という、我が国の声調変化を蒙り、再び上声となったものが存すると思われるのである。

**(5)他本との比較**

本項では、保阪本と比べ大きな相違の見られた前項までに述べた事柄について、建保本以下の諸本を合わせて比較することによって、本資料を、蒙求読誦音史の中で眺めてみたい。

先ず、「一音節平声軽字の上声化」について、保阪本の一音節平声軽字に、建保本以下の諸本で、如何なる加点がなされているかを見るに、表Ⅴの如くである。

表Ⅴ

| | 平軽 | 平重 | 上 | 去 |
|---|---|---|---|---|
| (2)建 | 4 (5) | 40 (54) | 0 | 0 |
| (3)岩 | 4 (8) | 40 (52) | 15 (21) | 0 |
| (4)康 | 9 (15) | 45 (65) | 1 (1) | 0 |
| (5)竜 | 21 (27) | 33 (43) | 1 (2) | 0 |
| (6)和 | 1 (1) | 23 (24) | 0 | 2 (2) |
| (7)真 | 2 (2) | 17 (19) | 0 | 1 (1) |
| (8)附 | 3 (4) | 51 (72) | 0 | 0 |

(3)岩崎文庫本には、前述の如く、上声に移行した例が見ら

れるが、他本では、(4)康永本に一例、(5)竜谷大学図書館本に二例存するのみである。康永本の一例は、「髭」字（10行目）であり、平声と共に加点され、平声点に合点が施されている。竜谷大学図書館本の二例は、「之」字（52・132行目）に対してのものである。例数は少ないが、この三例が、平声軽音節の上声化による上声点加点例である可能性は、存する。

また、岩崎文庫本では、保阪本の平声軽が、平声重となった例が多い事も述べたが、保阪本の平声軽点が、平声重となる例は、建保本以下の諸本にも多く、平声軽の声調が、不安定な存在であったことが窺える。平声軽点加点例を有する字に対して、別の箇所では平声重点が加点される例は、保阪本内でも珍しくは無く、岩崎本だけの問題ではないのである。[20]

次に、「一音節去声字の上声化」について見る。『広韻』去声字の内、保阪本でも一音節去声字である字について、建保本以下諸本での声調をまとめたものが、表Ⅵである。[21]

(3)岩崎文庫本以外の諸本には、上声の例は極めて少なく、此処でも、岩崎文庫本が特異な存在であることが知られる。だが、岩崎文庫本以外の上声点加点例も、「一音節去声字の上声化」によるものである可能性は、否定できない。

最後に、「上声全濁字の去声化」の割合について調べると、表Ⅶの如くである。

(1)保阪本の天暦頃点は、一音節字の去声化の割合と、二音節字の去声化の割合が、ほぼ等しい。

(3)岩崎文庫本が、一音節字と二音節字とで、大きな相違を

表Ⅵ

| | 平軽 | 平重 | 去 | 上 |
|---|---|---|---|---|
| (2)建 | 0 | 0 | 60 (74) | 1 (1) |
| (3)岩 | 0 | 20 (21) | 10 (10) | 73 (105) |
| (4)康 | 0 | 0 | 80 (104) | 1 (1) |
| (5)竜 | 1 (1) | 0 | 72 (91) | 2 (2) |
| (6)和 | 0 | 4 (4) | 22 (26) | 1 (1) |
| (7)真 | 0 | 1 (1) | 27 (28) | 0 |
| (8)附 | 0 | 4 (4) | 73 (100) | 5 (5) |

見せることは、前項で述べた。(2)建保本・(4)康永本も、岩崎文庫本ほど大差はないが、一音節字の方が、去声化の割合が低い。この点から、この両本にも、「一音節去声字の上声化」が起きていたと考えられそうにも思われるが、先に見た処では、建保本・康永本には、「一音節去声字の上声化」の可能性の有る例は、一例ずつのみである。この両本には、一音節去声字を上声化させる声調変化が、一音節上声全濁字を去声化しにくくする力として、弱く働いていたと解釈されようか。

(5)竜谷大学図書館本は、一音節字・二音節字共に、他本に



表Ⅶ

| | 一音節字 平 | 一音節字 去 | 一音節字 上 | 二音節字 平 | 二音節字 去 | 二音節字 上 | 計 平 | 計 去 | 計 上 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| (1)保 | 0 | 23 (52.3%) | 21 (47.7%) | 1 | 26 (43.3%) | 34 (56.7%) | 1 | 49 (47.1%) | 55 (52.9%) |
| (2)建 | 0 | 18 (47.4%) | 20 (52.6%) | 1 | 36 (73.5%) | 13 (26.5%) | 1 | 59 (65.6%) | 31 (34.4%) |
| (3)岩 | 6 | 1 (2.4%) | 40 (97.6%) | 7 | 45 (77.6%) | 13 (22.4%) | 14 | 46 (46.5%) | 53 (53.5%) |
| (4)康 | 0 | 26 (57.8%) | 19 (42.2%) | 0 | 50 (76.9%) | 15 (23.1%) | 0 | 76 (69.1%) | 34 (30.9%) |
| (5)竜 | 0 | 7 (15.9%) | 37 (84.1%) | 0 | 11 (18.0%) | 50 (82.0%) | 0 | 18 (17.1%) | 87 (82.9%) |
| (6)和 | 0 | 10 (83.3%) | 2 (6.7%) | 1 | 16 (80.0%) | 3 (15.8%) | 1 | 26 (83.9%) | 5 (15.6%) |
| (7)真 | 0 | 12 (100.0%) | 0 | 0 | 14 (82.3%) | 3 (7.7%) | 0 | 26 (89.7%) | 3 (10.3%) |
| (8)附 | 1 | 33 (73.3%) | 12 (26.7%) | 0 | 57 (90.5%) | 6 (9.5%) | 1 | 90 (83.3%) | 18 (16.7%) |

（各欄の上の数は、延べ出現字数。《 》内は、上声＋去声の中の各々の割合。）

比べ、去声の割合が低い。これは、同時期加点の(8)『重新点校附音増註蒙求』と比較しても不自然である為、韻書に依って加点したものと思われる。[22] この事から、竜谷大学図書館本が加点された室町時代には、伝承漢音声調の習得が、極めて困難であったことを知り得る。

一音節字・二音節字を合わせた「計」での去声化の割合に注目すると、(3)岩崎文庫本は、(1)保阪本天暦頃点よりも寧ろ古い層の漢音を反映しているかの如くであるが、これは、一音節字中に、上声化した例を含む故であることは、繰り返すまでもない。一音節字を除き二音節字に限って去声化の割合を見れば、岩崎文庫本は、建保本よりも高い割合を示しており、その書写時期に一致する。

以上、前項までに指摘した岩崎文庫本に認められた声調変化について、他本での実態を調べた。その結果、岩崎文庫本に見られた声調変化と同じ傾向を明確に示す資料は、今回使用した『蒙求』諸本中には、存しなかった。

## 四、結び

前節に於いて、『蒙求』の一本である岩崎文庫本の中に、次の声調変化が認められることを述べた。

(1)一音節平声軽字の上声化。

(2)一音節去声字の上声化。

(3)去声＋去声→去声＋上声、上声＋去声→上声＋上声、の

連音上の声調変化。

右の三つの声調変化は、いずれも、和語及び日本呉音の声調変化を反映したものであった。

かかる声調変化が、他本では指摘できないのは何故であろうか。

岩崎文庫本は、上声と去声の声点は勿論、平声重と平声軽の点をも明確に区別している。それらの声点が加点された漢字を類聚し、一音節字か二音節字かによって分類した結果が、一音節字と二音節字との間で明確な差異を見せる事は、岩崎文庫本の差声が、実際の発音に裏付けされて行なわれたものであり、当時の漢音声調として、十分な有効性を持つものであることを示している。

岩崎文庫本の如き資料の存する一方で、建保本には、新系切韻の反切音による声調の改変という形で、学習音が介入していたことが指摘されている。[23] この両本の加点状況は、一見相容れないものの様に思われる。しかし、これらは共に、伝承漢音声調の習得の難しさから生じたものである。建保本では、習得が困難な声調の字について、あくまでも本来の正しい声調を学ぼうとし、その依り処を韻書に求め、岩崎文庫本では、聞き慣れない声調を、当時の国語の声調として自然な風に改変して受け入れ、加点したのである。

康永本の「秘本」を以って校合を行なう立場は、正しいものを求める建保本に近いものであろうし、康永本で合点が付された声点が示す声調は、保阪本の天暦頃点と多く一致する。

竜谷大学図書館蔵本は、上声全濁字に、韻書に依って上声点を加点した祖本の移点本であろうことは、前述の通りであり、上声全濁字以外の声点加点は、大旨、保阪本と一致する。

鎌倉時代の和語及び呉音では消滅しかけていた声調を含み、当時の国語として不自然な声調連続を強いられる保阪本に代表される伝承漢音による『蒙求』読誦は、鎌倉時代の人々にとって既に、極めて困難な事であったと思われる。その様な状況の中で、厳密に伝承漢音を伝えようと努力したものが、建保本・康永本・竜谷大学図書館本であり、国語アクセントに同化して行ったものが、岩崎文庫本なのである。

本稿は、日本漢音資料の一つである岩崎文庫本『蒙求』の中に、我が国に於ける声調変化が認められることを指摘したものである。日本漢音声調が、和語・日本呉音の声調に接近して行く様子を示した訳であるが、改変されながらも、それは、あくまでも漢音声調なのであって、鎌倉時代中後期には、未だ漢音声調が生きていた事を確認したものでもあるのである。

**注**

(1) 沼本克明博士『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』（武蔵野書院、昭和57年3月。）第二部第五章。

(2) 注（1）書、序論第二節第一項、四九頁。

(3) 「図書寮本文鏡秘府論の字音声点」（「国語学」61輯）。

(4) 「文明本節用集の朱声点について」（「国語学」91輯）。



(5) 築島裕博士「長承本蒙求字音点㈠（同補正）㈡」（「訓点語と訓点資料」第十輯・十一輯）に依る。

(6)(7) 両本共に、築島裕博士の調査ノートに依拠した。

(8) 広島大学図書館蔵写真版に依拠した。

(9) 沼本克明博士「読誦漢音に於ける学習音の介入――蒙求字音点の場合――」（「鎌倉時代語研究」第十輯）。

(10) 注（1）書、第二部第四章。

(11) 一音節字・二音節字の判定は、本資料の仮名書音形に依る。

(12) 小松英雄博士『日本声調史論考』第二部第四章・第五章、金田一春彦博士『四座講式の研究』四八五頁、参照。

(13) 注（12）に同じ。

(14) 平声軽は、平声から派生したものであるとする意識を、漢字に差声する者の方が、強く持っていたと予想され、平声軽を避け、別の声調とする際には、平声とすべきであるといった加点者の意識が存したことが、例えば、考えられようか。和語の場合と合わせ、考え直してみる必要が有ろう。

(15) 金田一春彦博士『四座講式の研究』四八五頁。拙稿「呉音一音節去声字の上声化の過程」（「鎌倉時代語研究」第十輯）。

(16) 金田一春彦博士『国語アクセントの史的研究原理と方法』四五・四六頁。

(17) 注（15）拙稿。

(18) 注（1）書、四二二頁。

(19) 拙稿「呉音二音節去声字に対する上声点加点例について」（「国文学攷」第113号）。

(20) どの様な場合に平声となるのかが、最も問題となるが、この点についての分析は、未だ成し得ていない。後考にまちたい。

(21) (2)建保本・(4)康永本には、上声・去声両点が加点された例が見られるが、注（9）文献の「もと去声であったものを反切によって上声に修正したものと解釈出来る」とする説により、本来の去声を採り、算入した。

(22) 『蒙求』諸本中に、上声全濁字の去声化の割合が、これ程低いものは知られていない事と、加点時期とから、『孔雀経』の如き古い層の漢音声調を伝えているとは、考え難い。

(23) 注（9）文献。

〔付記〕本稿は、昭和62年度国語学会中国四国支部研究発表会に於いて口頭発表したものに補筆してまとめたものである。席上、小林芳規先生・沼本克明先生・金子彰先生より、有益な御教示を頂いた。また、成稿に当り、小林芳規先生に御指導を賜った。記して学恩に感謝申し上げる。（広島大学大学院文学研究科博士課程後期）